
またはそれにじゅんずるなにか

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またはそれにじゅんずるなにか

【Nコード】

N1820G

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

新聞部からの挑戦状。『宇宙人、またはそれに準ずるなにか』とはなんだろうか。

☆☆高校にはグラウンドが二つある。

主に野球部が使う第一グラウンドと主にサッカー部が使う第二グラウンドの二つ。

その内の第二グラウンドの周りにめぐらしてあるネットの一角。そこに一枚の紙が貼ってあった。

生徒諸君に次ぐ

宇宙人、またはそれに準ずる何かを持って来たまえ
持ってきた人には記念品を贈呈しよう
以上だ

☆☆高校新聞部部长

そこにはそう書かれていた。

ある者はどこかのライトノベルじゃああるまいしと言いながらその場を立ち去り、またある者は新聞部部长が言うからには答えがあるはずだと言いながら真剣に考えていた。

何人かの生徒は答えに気づいたようで、駆け足で校舎へ向かう。
だがそれは少数派だった。

新聞部部室。

目の前には並べられた景品の数々。

「部長、大盤振る舞いですね」

部長と呼ばれた人物は、窓の外を眺めながら返事をする。

「谷崎君、それは当然だ。答えを正確に一回で言い当てることのできる人間は、この学校では限られている。多くて五人だ」

「僕はその中に入っていない、よね」

「当然だ。青梅君ならばすぐに理解しただろうがな」

もう一人、谷崎と呼ばれた人物は、がくりと項垂れた。

さつきからこの部室には頻繁に人がやってくる。

放課後になってから張り出したあの挑戦状のせいだった。

トントン

扉がノックされ部長が、どうぞ、と言うと中に生徒が二人、入ってくる。

「失礼します。答えが分かりました」

と、先に入ってきた生徒は言った。

「どうぞ、答えたまえ」

そう部長に促されて、その生徒は答える。

「正解は、人間ですね。僕、連れてきましたよ」

「残念だが、はずれだ。やり直すか、諦めたまえ」

部長はその生徒を見ることがもなくそう言った。

突然そう言われても納得のいかないその生徒は、憤慨気味にこう聞く。

「なんでですか」

それに部長は答えることはなく、代わりに谷崎が答えた。

「えっと、まずあの文面をよく思い出してみてください。そこにはこう書いてあったはずですよ。宇宙人またはそれに準ずる何かを持つて来たまえ、と。もしこの答えが、人間だったならば、それに準ずる“誰か”を、という風に書くと思います。ですから、この答えは人間ではありません」

その説明に納得したのかしないのか、二人の生徒は去って行った。扉の閉まる音が空しく廊下に響いた。

しばらくしてまた来客があった。

何やら扉が開く前から変な声が聞こえてきた。

コンコン

扉がノックされ部長が、どうぞ、と言うと中に生徒が一人、入ってくる。

「連れてきました、宇宙人に準ずるもの」

そう言って彼が差し出したのは、サルだ。

あの霊長類のサルだ。

だが部長はあっさりとうこう告げた。

「残念だが、それも違う。やり直すか、諦めたまえ」

そう言われた生徒は、とぼとぼとその猿を連れて出て行った。

谷崎は聞く。

「どうして、サルが間違っているんですか？」

部長はチラッと谷崎の方を向き、そしてまた外に視線を戻してから答えた。

「サルは連れてくるものだ。持ってくることもできないが、彼は連れてきましたと言った。それだけだ。それと谷崎君、掃除をしておきたまえ」

見ると、床にはサルの毛屑が散らばっていた。

谷崎は部屋の隅にある掃除用具入れから箒を取り出すと、毛を集め始めた。

ガラッ

扉が突然開かれた。

そこから現れたのは、青梅だった。

「遅れましたです」

「いや、構わない」

そう部長が返事をする、青梅は谷崎に向かって挨拶をした。

「おはようです」

「おはよう」

「ところで、谷崎先輩は分かったです？」

いきなり尋ねられた谷崎は少し驚いたが、すぐに返事をする。

「いや、僕は分かっていない」

「そうですかです。意外と簡単ですよです」

そう言って青梅は首を五度ほど傾けた。それに合わせて白い髪が揺れる。

青梅はパイプ椅子に座ると、部屋の中央に置かれたテーブルに乗っているノートパソコンを操作し始めた。

何人か答えを言いに来たが、どれも正解ではなかった。

日がオレンジ色に変わっていった頃。

ドン

何かが扉にぶつかる音がした。

その数秒後、扉が勢いよく開かれる。

「あの、すみません。答えが、分かりました」

そう言って現れたのは二人の男女だった。

部長は窓から離れずにそっちを向いた。谷崎や青梅も二人を見る。

「どうぞ、蕨奈々子君に高橋君だね。入りたまえ」

「失礼します」

蕨と呼ばれた女子だけがそう言って、二人とも中に入ってきた。

青梅がいつの間にかパイプ椅子を二つ用意していた。

そこに蕨と高橋は座る。

蕨の手元には一冊の文庫本があった。

「答えは、これ、です」

そう恐る恐る言った蕨が差し出したものは、ライトノベルだった。谷崎は不思議がる。これのどこが宇宙人やそれに準ずるものなのだろうか、と。

だが、部長と青梅は違った。

「うむ、正解だ」

「あたりです」

これが正解だと言ったのだ。

蕨が嬉しそうに高橋を見る。

対する高橋もその笑顔に応えていた。

谷崎だけが置いてけぼりを食らったようだった。

蔵と高橋が、青梅から景品の麩菓子^{ふかし}をもらって帰ったあと、谷崎は未だに考えていた。

「谷崎君は、本当に分からないのかね」

「はい。あの文庫本の、どこが宇宙人なのでしょうか」

「よく考えてみたまえ。我々は一度もあの文庫本が答えだとは言っていない」

「文庫本ではない、としたら、題名か、紙か、文字か、絵か」

そこで何か分かったのか、谷崎は部長を見た。

「絵ですね、答えは」

「そうだ」

「谷崎先輩も分かってよかったです」

青梅に笑いかけられ、照れる谷崎であった。

翌日、新聞部からの挑戦状があったネットに、また別の紙が貼り出されていた。

生徒諸君、昨日の問題は解けただろうか
宇宙人といっても、この地球も宇宙に存在する
したがって、人間も宇宙人とすることができ
人間しか宇宙人と定義できないかもしれないが
宇宙人という呼び方は人間を中心に考えた物だ
地球外生命体という呼び方があっているだろう
余談になってしまったが、次に移ることにする
次に考えるのは人間に準ずる何か、とはなにか
これは、単純に人間を模した物を考えればよい
正解は幾つかあるが、分かり易いのは人物画だ

この掲示以降の回答は、無効とさせていただきます
以上だ

☆☆高校新聞部部长

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820g/>

またはそれにじゅんずるなにか

2010年10月8日15時15分発行